



今後の商業教育に期待すること

前 全国商業高等学校長協会・
公益財団法人全国商業高等学校協会理事長
前 東京都立芝商業高等学校長

林 修

私は令和3年3月31日をもちまして東京都立芝商業高等学校長を最後に定年退職するとともに、5月15日をもちまして全国商業高等学校長協会・公益財団法人全国商業高等学校協会理事長を退任しました。昭和58年4月、東京都に採用されて以来38年間の教員生活を無事に終えることができましたのも、ひとえに皆様のお力添えのお陰です。この場をお借りして心から感謝を申し上げます。

さて、このたびの退職及び退任にあたり、じっしょう商業教育資料への寄稿依頼を頂戴しました。「今後の商業教育に期待すること」として私なりのメッセージを送りたいと思いますので、何かの参考になれば幸いに存じます。

新学習指導要領への対応

平成30年3月30日に告示された新しい高等学校学習指導要領が、いよいよ令和4年度から年次進行で実施されます。今回の改訂では、育成を目指す資質・能力が学習者主体の視点で示されるとともに、教科「商業」では経済のグローバル化や情報技術の進歩への対応、観光産業の振興や地域におけるビジネスの推進への対応、ビジネスにおけるコミュニケーション能力とマネジメント能力の向上への対応等を通じ、地域産業をはじめ経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人を育成することが求められています。

また、我が国が目指すべき未来社会の姿として政府により提唱された「Society5.0」は、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会であり、人工知能（AI）、IoT、ビッグデータ等の先端技術により創出される新たなサービスやビ

ジネスによって、私達の生活は便利で快適なものになります。しかし、このような最新テクノロジーの活用により私達一人一人を取り巻く環境がどのように変化しても、「超スマート社会」において人間らしく豊かに生きていくためには「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」を基礎として自己の主体性を軸にした「学びに向かう力、人間性等」が必要となります。

このような資質・能力を育成するために、学校では生徒一人一人の興味や関心に応じて、地域社会、企業やNPO、大学等と連携した学びの場を提供したり、多様な人とコミュニケーションを図りながら協働する場面を設定したりするなど、「社会に開かれた教育課程」による学びを積極的に推進していかなければなりません。

こうした体験と実践を伴った探究的な学びについて、商業高校では科目「課題研究」をはじめとする各商業科目等の中で既実践しており、時代に求められる人材の育成を他学科に先駆けて取り組んできたことは誰もが自負するところです。しかし、一方で、文部科学省が令和3年3月31日に公布した省令改正において、「普通教育を主とする学科」の弾力化の一つとして「地域社会に関する学科」の設置が示され、今後は普通高校においても地域における人材育成の中心的機関として、地域社会に根差し、地域課題に対応した学びに取り組んでいくことになります。

そこで、商業高校においては現状に満足せず、コロナ禍という経験を活かしながらビジネスの視点で課題解決することを常に忘れずに、その学校ならではの新しい価値を創造する人材の育成に、より一層努めていく責務があると考えています。

産業界等との連携

さて、私が3年間校長を務めた東京都立芝商業高等学校では、新しい学習指導要領の趣旨を踏まえ、様々な地域や企業等と連携しながら、「芝商ならではの」の特色ある教育活動を展開してきました。

校舎は東京都港区に所在し、JR 浜松町駅から徒歩5分、空の玄関口である東京国際空港（羽田空港）まで東京モノレールを利用して30分、伊豆・小笠原諸島の玄関口である竹芝客船ターミナルまで徒歩3分に位置しています。また、校舎のある竹芝エリアは東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を機に、複数の大規模な再開発プロジェクトにより令和2年度には校舎正面に「東京ポートシティ竹芝」（ソフトバンクグループ本社等が入居）、校庭裏には「ウォーターズ竹芝」（四季劇場やアトレ等が入居）といった大規模複合施設が完成するなど新しい街づくりが進められています。こうした恵まれた立地条件を最大限に活かし、JR 東日本、東急不動産、文化放送、ゆりかもめ等といった企業をはじめとする様々な外部リソースと連携して、東京都心の商業高校らしい学びを通じ生徒は積極的に街づくりに参画しています。

ここで、いくつかの取組を紹介します。

(1) 地元企業との連携

平成30年6月、生徒会役員の生徒が「地域の方の何かお役に立つことができないか」という発想のもと、学校で不要になった傘の再利用に着目し、最寄りの東京臨海新交通臨海線（ゆりかもめ）・竹芝駅の利用者に対して突然の降雨の際に無償で傘を貸し出し、使用後に返却してもらうというシェアリング・サービスを企画しました。生徒は自ら働き掛けゆりかもめ本社で企画をプレゼンテーションした結果、この提案が見事に承認され、竹芝駅の改札口に貸し出し用の傘立てが設置されました。現在もこのサービスは利用されており、駅の利用者は突然の雨にもビニール傘をわざわざ購入しなくても済むことから、特に梅雨の時期には用意した傘が全て貸し出されていることもあります。設置後も外国人向けに案内板に英語の説明を表記するなど、生徒は日々サービスの改善・向上に努めています。



企業でのプレゼンテーション

(2) 農村地域の活性化

平成26年度から福井県今立郡池田町との交流を進めており、都会にはない農村地域のコミュニティや地元の方々との触れ合いを通して、地域の活性化に向けた高校生ならではの斬新なアイデアを提案しています。平成28年度には都市と農村の新たな連携と発展に向けて「芝商いけだキャンパス共同事業」の調印式を行い、生徒は池田町を学びのフィールドとして様々な活動を体験し地域社会との関わりや将来の在り方を学習しています。

平成30年8月は、模擬株式会社芝翔の3年生が同町に伝わる能楽文化をアピールするために「お面作り体験」を企画し、同町の冒険体験施設「ツリーピクニックアドベンチャーいけだ（TPA）」で体験会を開催しました。当日用意した人やキツネなどの無地のお面には、同町の豊富な森林資源をPRするためにおがくずをリサイクルした粘土を使用するなどの工夫を凝らし、TPAに来場した家族連れらに色の塗り方を説明し子供達との会話を楽しみながらお面作りを手伝いました。この体験から生徒は「その土地のことを好きになることから地域の活性化は始まる。」と感じたようです。



子どもたちのお面作り

平成31年2月には、同町の雪深い特性を逆に利用して、放送部に所属する生徒が町民の方に冬でも屋外で楽しむ機会を提供するために角間郷冬まつり「雪灯華（せつとうか）」を企画し、同町の新保スキー場でイベントを開催しました。このイベントは前年の冬に開催の予定でしたが大雪のため中止となり、生徒にとって2年越しに思いを実現する機会となりました。イベントは角間郷地区の方々と協力しながら準備を進め、雪の中の「宝探し」や雪の塊を積み上げる「イグルー（かまくら）」、イルミネーションや花火など盛りだくさんの企画に、町民だけでなく町外からの来場者も大勢いました。ある生徒は「自分達だけでは実現できなかった。地元の方のお陰です。」と感想を述べていました。



雪で作ったイグルー

また、令和元年8月には、模擬株式会社芝翔の2年生が3泊4日で同町を訪問し、7か所の民泊先に分かれて地域の方と交流しました。生徒は同町の特産物である味噌やこんにゃく、きび団子などの製造を手伝いながら池田町について理解を深めるとともに、今後の学習に活用できる素材を収集し、翌年には同町の玄米と赤紫蘇、福卵を使用したパウンドケーキを商品開発しました。



きびの収穫作業体験

(3) 島しょ地域との交流

島しょ地域の玄関口としてフェリーの発着が多い竹芝、その地域に立地している本校の特性を活かして、令和元年9月、校庭で小笠原村の盆踊り大会「Bonin Bon-Odori Festa × 小笠原 DAY 2019」を開催しました。このイベントは前年に小笠原諸島返還50周年記念事業として始まったもので、「お盆の時期に島に帰省できなかった人を対象に開催できないか」と小笠原村から相談があり、生徒を参加させていただくことを条件に会場を提供しました。当日、生徒はボランティアスタッフとして活動し、来場した約2,800名の方に丁寧に対応するとともに、竹芝から船で片道約1,000キロメートル24時間離れた東京の食や文化等を学習しました。



校庭での盆踊り大会

また、令和2年11月と令和3年1月には、模擬株式会社芝翔の3年生が「物産展」を開催し、都立八丈高校園芸科の生徒が生産したサトイモやサツマイモ、都立三宅高校農業科の生徒が製造したジャムをそれぞれ仕入れて、地域の方や保護者にも販売しました。生徒は価格の設定やチラシの作成のほか、感染症対策を講じながらの販売活動を行うことで、より多くのことを学んだようです。



物産展での商品販売

(4) コロナ禍での地域貢献

令和2年12月、一般社団法人竹芝タウンデザインの御支援により学校の植栽帯を整備しイルミネーションを設置しました。年末を迎え、コロナ禍の暗く重い雰囲気の世界の中に灯りを照らし少しでも希望のある新年を迎えたい、地域の複合施設に多くの人が訪れ賑わいを取り戻してほしいという願いのもと、1・2年生は心を込めて13,000個のLED電球の飾り付けを一生懸命に行いました。



植栽帯のイルミネーション

このほか、前述した「ウォーターズ竹芝」に作られた、東京湾の環境を保全するための人工の干潟「竹芝干潟」の活用についても、SDGsの学習の一環として取り組んでいます。

このように商業高校では、校内で習得した知識・技術をもとに外部と連携して調査研究やフィールドワーク、商品やサービスの開発といった学習を行い、これからの社会で必要となる「決まった答えのない課題に対して多様な人達と協力しながら答えを見つけ出す力」を育成する必要があります。各校におかれましても、企業や地域のもつ教育力や資源を積極的に活用して「社会に開かれた教育課程」を実現するとともに、「創造的な力」と「実践的な態度」を身に付けた次代を担う力強い人材を育成していただきたいと存じます。

商業教育の原点

話は変わりますが、コロナ禍における新しい日常では、感染症対策として手指消毒、ソーシャルディスタンス、オンライン授業などは当たり前になりましたが、その中でも最も身近なものがマスクの着用です。このマスクを着用しながらの会話では、呼吸がしづらい、マスクに遮られて声が聞

き取りにくい、顔の下半分が隠れて相手の表情が読めない、こちらの感情も伝わりにくいなど、誰もが経験したのではないのでしょうか。そのため、いつもよりも大声で話したり、相手の話を聞く時も大きく頷いたり首を振ったりすることが、以前よりも増えたような気がします。また、高校生の就職試験や大学入試の面接試験においてもマスクを着用したまま対面による面接が実施されたり、Webカメラを通してオンラインで面接官とやり取りしたりするなど、コミュニケーションの難しさを様々な場面でも感じることがありました。

このコミュニケーション（communication）の語源はラテン語のコミュニス（communis）と言われており、「共通の」「共有の」という意味があるようです。つまり、コミュニケーションとは人と人とお互いの心を共有することによって何らかの影響を与え合う行為と行うことができます。単に言葉をキャッチボールするのではなく、人の感情や意思、情報などを受け取り合い、伝え合い、そして分かち合うといった姿勢が大切です。

これからの時代に求められる力の一つとして、「コミュニケーション能力」が必ず取り上げられます。そして、このコミュニケーション能力の育成は商業教育の原点、基礎基本であり、商業高校生だけでなく商業科教員の誰もが必ず備えていなければならない力です。特にコロナ禍で企業においてはテレワーク、学校においてはオンライン授業が一般化されてきた時代だからこそ、お互いの心に寄り添うことをより一層心掛ける必要があります。生徒には商業教育を通して「自分が伝えたい情報を、相手の置かれている状況を考慮しながら、誤解されないように確実に伝え共有する」コミュニケーションの取り方を身に付け、卒業後にはその力を十分に活用し、同じ組織の中で他者と目標を共有しながら協働して積極的に課題解決に取り組む職業人になることを願っています。

結びに、これからの商業教育を支える先生方には御自身のコーディネート力を十分に発揮して、外部のリソースを最大限に活用し、今後も生徒一人一人を有意な人材として社会に送り出すことを期待しています。